第４ステージ（合同ステージ）

男声合唱のためのカンタータ　『土の歌』

作詩：大木淳夫（1895 ～ 1977）　　作曲：佐藤　眞（1938 ～　）

Program-Note

詩は広島、長崎の恐ろしさを憂い、反戦、反原爆の祈りを込めて作られた。当時、まだ芸大生だった佐藤眞が混声合唱とピアノのためのカンターとして作曲したのものを男声合唱のために編曲したものである。今回は､呼びかけに応じて頂いた各地区の合唱団の仲間たちに加えて、石巻メンネルコールの皆さんにも加わって頂き、総勢 70 人の演奏である。

第一楽章	農夫と土	自然の恵みの神秘さ、土への感謝。
第二楽章	祖国の土	人は皆、土に生まれ、土に還って行く。
第三楽章	死の灰	原爆のことが書かれ、人間と科学の汚さを描いている。
第四楽章	もぐらもち	第三章と同じく、原爆のことが書かれている。核で汚染された世界を恐れ、地にもぐって暮らす人間をモグラに例えて皮肉っている。
第五楽章	天地の怒り	天地は人のなしたことを怒り､このような「今」を我々に与えた。「我が身を省みよ。まだこれでは足りぬ。誰しもが等しく省み、今を見つめ、歩いて行かなければならない」と訴える。
第六楽章	地上の祈り	大地への想いと反戦の祈り
第七楽章	大地讃頌	この作品を締めくくる大地への限りない讃歌

「地の上に花咲く限り　よろこんで日ごと営み　悲しみに耐えて生きよう」

このことばを歌うとき、震災の年の７月、石巻　日和山から見渡した灰色の町が脳裡にうかび、胸が痛みます。

その石巻の仲間とともに歌うこのステージは、とてもとても大きな意味があるのです。

松田　有子　記

プロフィール

指揮者　松 田 有 子（まつだ　ゆうこ）

ほぼ４半世紀「指揮者」の名に違わぬ情熱的でエネルギッシュな人だ。

４半世紀も携わっていればそれなりの年も重なるものも・・。いまだに“姫”とよばれるだけの感性（知力、体力）を磨く努力に余念がない。得たものを明るく披露し、“妙”を得た例えで自分の世界に誘い込み、音楽を作り上げて行く行動派である。最近では奇妙な体操にマッチさせた「腹式発声法」が効果をあげている。この行動力が団員を惹きつけ多くの歌う仲間の信頼を得ている由縁だ。「２０２０年には３０周年記念演奏会を…」と意気込んでいる指揮者松田有子である。現在５つの合唱団の指揮者として指導に当たっている。

ピアニスト　松 田　 怜（まつだ　れい）

長身の華奢な容貌の何処からあの力強く、繊細な“音”が出せるのか、センスある若者だ。

現在、国立音楽大学大学院在学中にして幅広いジャンルに挑戦し、腕に磨きをかけている将来を嘱望された演奏家である。今年１月、東大和市民会館ハミングホールで、ピアノリサイタルを開催した。現在５つの市民合唱団の伴奏を担当している。これまで　ピアノを菊池大成、奈良井巳城、小佐野圭、安井耕一の各氏、作曲を山本康雄氏、指揮を大沢健一氏に師事。

シュテファン寺院、シェーンブル宮殿とウィーンの街

チラシ、ポスター等にも使ったこの絵は団員が描いたものです